[illegible]八[illegible]

誹諧職人盡前集

職人盡歌合は、甘露寺親長卿の御詠にして、烏丸光廣卿の御判なるよし。御風流申すにやおよばん。是をひとへにまなびまらさんとにはあらず、たゞ給の様言葉書の古代めきて、まとうとなるをうつしとり、題毎に古人の句をはしめに置、今の人〳〵の句を乞、わがをろかなるをもくはへて、誹諧職人盡と名をよぶもの也

豐 參 和

御句到來次第載之句順混雜

ばんざう　かぢ

涼しさを飛騨のたくみが指圖哉　芭蕉
大工達久しき顔や神の秋　其角
楪はきはをのが棚つる大工かな　芭蕉
棟上の鏡ひかるや春の月　咫尺
目に涼し坂をころがすかんな屑　常宇
船大工音にかはれてしぐれかな　沾山
番匠の宿に蛾やさつき雨　卷石
足代へ誰かはこひて雉子の聲　白曉
木がらしや大工童に火の氣なし　甘石
日ぐらしや仕廻ひ大工の足のうら　沖而
番匠の建た宿かすしぐれかな　文鯉
番匠や柳に風の工夫もの　其月
朝がほの垣につれなき大工かな　淇洲
番匠の鑿とぐ空や舞雲雀　八橋亭 其流
花鳥や寺の手本に天王寺　東風
氣のひづみ十夜に直す大工かな　兎園

ひら／＼と蝶むらがるや鉋屑　用枝
ばんざうの歸つた跡もきぬた哉　佐原　青坡
ふらこゝの聲もきこゆやひだたくみ　寥和
春雨や光うつろふ鍜冶が槌　桃首
小米花奈良のはづれやかぢが家　万乎
をく霜を手際にとくや鍜冶が軒　沾魯
夕立や鍜冶が内から稲びかり　也足亭　登度
大根煮る鍋もちいさしかぢやの火　沖而
ほたけ／＼わらべは門に市をなし　紫仙
立よればむつと鍜冶屋の暑哉　二世　立甫
初霜の置所なし鍜冶の軒　北之
正宗の隣はさむしかぢの音　沼津驛　同波
春の内に夏は來にけり鍜冶屋町　小田原驛　司翺
錠鍜冶の工みそめけん逆卷舟　立國
番鍜冶へ届け文あり縣めし　寥和

壁塗　ひはだぶき

爐ひらきや左官老ゆく鬢の霜　芭蕉
鶺鴒やかべ土こぬる畔のうへ　磨盤
片壁や雪ふりかゝるすさ俵　圃吟

蜂とまる木舞の竹や虫の糞　昌房
ぬり直す壁のしめりや軒の華　卓袋
壁しるしいかに鴫野の秋のくれ　周竹
蔦這ふてかべを塗足す庵哉　琴風
燕よわかしら土はまことなし　不詳作者
壁ぬりや塗出す處が雲の峰　水府　低哉
生壁に寝られぬ旅の寒さ哉　我郷
つばくらや左官と顔を見合る　文尺
兼康の屋根に手つまの暑さ哉　路道

壁土の水にもすめるかはづかな　毫和
屋根ふきと並らんでふける菖蒲哉　其角
木がらしの根にすがりつくひはだ哉　桃林
さし茅の棟をばいかにわすれ草　祇風
こがらしやふいて來る身の跡しさり　九皐亭　何江
屋根ふきやひとりは霞む槌の音　水府　豆花
やねふきは先耳ちかやほとゝぎす　蓮外
やねふきのほぐしかねるや蔦かつら　夜白
屋根ふきの笠に反來る暑さかな　千糸
やねふきの恩に着するや五月雨　里山
屋根ふきの梯子を旅やしぐれの日　水府　低哉
長き日を屋根にやねやのひる寢哉　越谷　千鳥
やねふきに遊べとふるやけふの雪　伊豫松山　吏五
やねふきは雇れて來た水鷄かな　鳥羽　霜鵲
水茶屋の葺むらみせずはなの雪　梅徳
屋根ふきはあたまのうへの田植哉　了因
やねふきよ人丸の目にも花の雲　井蛙
やねふきの吹れてふくや初嵐　白主
神樂月甘露ふるかもひはだぶき　毫和

研　塗師

高雄なる砥取の山のほとゝぎす
おのがかたなをとぎすとぞなく
砥にあてしかたなも夜半の郭公　環堵庵　桃兆
曇る空晴てするどき氷かな　常龍
正宗へ漏るや研屋のさよしぐれ　玉宇
寒研の音もするどく更る夜や　毫和
あの中にまきゑ書たし宿の月　はせを
なでしこや蒔畫書人を恨むらん　越人

磨出しも見事ｶむらもみぢ　佳節
花くもりよし野うるしや白うるし　一尺
木がらしやぬしの紙帳も波の音　魚沾
龍田山爐やぬるでは刷毛序　寥和

こうかき　機織

しぶ柿はをのが手ぞめか村もみぢ　宗鑑
紅梅は誰ふれし香の染小そで　前　立甫
さら〳〵に戀は倭ざらさたつ田姫　二世　調和
磧ひとりよき染物の匂ひかな　大坂　酒堂

島原の外も染るや藍はたけ　嵐雪
帷子や佐保と龍田の間の姫　前　青峨
大雪にかた付がたきしら地哉
此句は越後國紺屋文左衛門といふもの
一代一句ならんと晋子物かたりあり
粒にさゝ師走さくらや紺屋町　秀葉
光琳はかはゆきそめやきそはじめ　女　可代
ものあれてこゝろも寒し紺屋竹　沖而
さみだれの空や紺屋の物ぐるひ　万井
紺搔の明日といへとも花ざかり　埃庵
染草のすゑや水茶の花ざかり　知圭
京ぞめの中にも上手をくら山　寥和
蟬なくや布織る窓の暮時分　曉鳥

當麻にて
衣がへみつから織らぬ罪ふかし　そのめ
秋の日や機をり虫も織つめる　眞壁　秀橘
のびちゞみはた織足すやきり〴〵す　裏袖
機をりや二人べ分る秋の窓　仙菓
窓寒し法師が母のはたの音　寥和

檜物師　**車作**

喰つみも木曾のにほひの檜物　　倚水

檜物屋も間に合せけりお取こし　　養浩

飛驒山の雪も凝たる湯桶かな　　寥和

山さくらちるや小川の水くるま　　智月

斫にてちやつるまつりの車哉　　前　白雲

誂の車打夜やしかも雪　　玉榮

御車の調子聞ばやきりぎりす　　東風

下寺へまはるやはなの車〔又〕　　柳車

日もながく夜なべも牛の車哉　　志諷

涼しさや龜山殿の水普請　　寥和

蓮見の辭　幷句

池をめぐりて皆家也。朱楼白屋のそれがさまざまなる住かたは、左にもあれ右にもあれ、うちむかふ花のたよりはをのづから中流の島山にぞ愛情の眸はとゞまり侍る。さはいへ物堅き人がらをめづるにしもあらず。又尊き趺坐を思ひ出んは元より法氣ついたり。呉越の遠津國には、紅の袖に袂に採蓮のかほりを爭ひ、其一曲をうたひ傳へし。今のあつまの女どもは、ひたすら岡の櫻にのみあそび暮し、夏の詠の朝けしきを木男にまかせたる、口惜し。

三十の輻の落合ふ笺の蓮見哉　　龜毛

右龜毛は明石住人梁田先生の誹號也。江府におはしける時の作なり。車に便よろしければ、笺にあらはす。

鍋賣　**酒つくり**

君が代や筑摩まつりも鍋ひとつ　　越人

たが猫ぞ棚から落す鍋の數　　沾德

鍋の數いたゞきまつるつくま哉　　三征

鍋うりに先聞く須磨の櫻かな　宵々子
おもしろやかついで戻る鍋の雪　松井田　潭考
なべうりは鍋に汲也花の瀧　丹鳳樓　雨夕
ゆくとしや顔のさびしき古手鍋　寥和
きさらぎに酒の欲知るふすま哉　露沾
花ざかりいはゞみやこの酒屋哉　守武
酒一升九月九日使きく　宗因
花に風がろく來てふけ酒の泡　嵐雪
酒買にゆくか雨夜の一つ鴈　其角

山寒し酒買せけり尼法師　和及
いさ酒の降とやいはん雪の松　如泉
風に名の付て吹より新酒哉　そのめ
夕闇はほたるも知るや酒はやし　水鴎
小男の胸の毛光り寒づくり　冲而
見給へや杜氏老ても向ふ梅　志静
酒藏の一重降や秋のくれ　寸松
松の尾の祭へのぼる杜氏かな　白抄
酒めしの筵も白しあまの川　寥和

蛤賣　いをうり

はまぐりは野でも燒るゝ雉子かな　芳心
宮殿も買は賣べし蜃氣樓　常國
何所となく聲の時雨るゝ夜蛤　咫堂
蛤にならでや雪のむらすゞめ　寥和
鰹うりいかなる人を酔すらん　はせを
花よりも實こそほしけれ櫻鯛　兼載
都見ん小桶に鮗華かつみ　髙政
吻の細魚斗こそ囀らめ　一晶
塩魚の裏干す日也ころもかえ　嵐雪
魚店や莚打上て冬の月　里東
一塩に初白魚や雪の松　杉風
しら魚のしろき匂ひや杉の箸　大坂　之道
二の富は廓へおちて初がつほ　沾洲
若竹の香に新しき鱸哉　百里
世を見れば鰒に毒なし待乳山　青流
おちつきは魚屋まかせや櫻がり　利牛
夏陰や木末をはしる魚荷籠　秀室
賣る人の手もしら魚に目立けり　佐原　此溪
魚うりの世渡り寒し霜の朝　竹里亭　李冠
魚賣の師走也けり初松魚　老魚
元日は嗅きを知るか魚の店　寥和

傘張　あしだ作り

からかさはたゞゐかゝみの今朝の春　守武
さみだれはたゞ傘を晴間哉　正甫
傘張の眠胡蝶のやどり哉　重五
白雨にかさ借る家やま一町　圃水
傘張りや栞の花に迄よい日向　夏人

からかさの空をわすれて花の春　木牛
かさ張の蛇の目をまはす師走哉　水府　沾鱗
傘はりやかゞりも錦冬紅葉　常州眞壁　秀鴎
かさ張はすぼめて仕廻ふ時雨哉　小田原　華瀧
夕だちや日の影盗むからかさ屋　文尺
あぶら引傘の匂ひや草いきれ　鬼髪
傘にひくあぶらもをのが暑哉　祇明
かさはりやしぐれ來る日の放下僧　笠間　古淳
五月雨の雲かたつくや日傘張　寥和
馬下駄や引とも上らず厚氷　常矩
さみだれは浪の緒すげし足駄哉　長治
あしだはく僧も見えたり花の雨　翁
（原本此句の作者を「翁」としたるは誤にて杜國の句なり）
梅咲や一度は雪踏二度は下駄　我兄
雪解や都に出る下駄の跡　沾徳
卯月からぬからぬ顔や下駄作り　志友
棹鹿のよるべやかねかあしだにも　寥和

はく打　白かね細工

上人の顔に箔置けおめい講　史邦

箔うちは冬の紙帳に氣をこらし　龜仙
はく屋さへ障子明たる暑哉　寥和
こま鳥の音に似合しきしろかね屋　長江
しら魚やいきて働く銀目貫　如天
こがねより涼しさ增れ銀道具　寥和

山伏　地しや

峰入や雲に起臥ときんもあり　重頼
大みねやよし野の奥の花の果　曾良
初午や役行者の知らぬ路次　壺月

山ぶしの火の印むすぶ寒さかな　帆歩

山臥のはたけを通る暑かな　栢莚

やまぶしに貰ふて凄き葺かな　佐原　青藍

山ぶしのだまつて通る枯野哉　草也

螺貝を吹さして行さくら哉　雪麿

山ぶしにちるや櫻の一つかみ　樓川

みね入や隣も寐せずめつた町　寥和

物すごの女の經や雪の月　寥和

油賣　もちいうり

あぶらはかる玉散ばかりたま柳　専吟

哀に淋しきものは

あぶらいや遠里小野の鹿の聲　法眼　不角

はまぐりの山吹煉もあぶらかな　似詩

やま寺の春を惜むやあぶら賣　小田原　錦江

かはかふの聲秋深しあぶら筒　沾涼

口きりの柄杓さはきやあぶら賣　貴月

秋の暮油柄杓の露重し　大鶴

夕ぐれに秋の聲あり油うり　鳥羽　嵐角

蚊遣火やなをたそがるゝ油賣　里百

糸遊を柄杓で汲やあぶら賣　甲府　泉布

祇園會や忠盛しばし油うり　夫憐

油屋の燈白きしぐれかな　寥和

垣衣草さへ枯て餅買ふ亥子哉　はせを

（『甲子吟行』には下五を「やどり哉」とせり）

雨の手に桃と櫻や草の餅　仝

燒ずとも草はもえなんわらび餅　伏見西岸寺　任口上人

もち賣の下馬によしある玄猪哉　五棊

餅賣のわれは酒買ふや雪の市　寥和

追加

瓢簞の花見がてらやあぶら賣　白主

筆結　莚打

筆にこそ墨染さくらかばさくら　德元

君が代の久しかくべき試筆哉　正村

筆ゆひの顏に夏毛のあつさ哉　志友

宗鑑へ小法師よりぞつく〳〵し　寥和

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪

庭に居て月見ながらや莚織　利合

きりぐ〳〵す鳴や霜夜のむしろ打　咫斗

冬の日や京間に足らぬ莚うち　トバ芭秋改　巴洲

蟬のむしろ織れとや霜の聲　雪麿

名どころや此よし野にも花むしろ　寥和

烏帽子折　あふぎ賣

松魚にも着せてみましやゑぼし折　寥和

物書て扇引裂名ごりかな　はせを

逆さまに扇をかけて又涼し　丈草

繪合に十二のほねのあふぎかな　守武

しら菊に與一か扇さもあらば　秋色
扇屋の暖簾白しころもかへ　嵐竹
おふぎ折いかに持たる汗拭ひ　千那
扇折子に恥しき化粧ひ哉　倚白
つくぐと繪を見る秋の扇哉　小節
葉は直にまいらせ扇嶌尾のはな　安士
ひらく手に梅が薫りや扇うり　祇中
正月をまねいで行や扇賣　和菜
しら雪をそくいにせうよ加賀扇　旨原

涼風を封じこめたりあふぎ賣　好古堂以貫
夕顔に一聲くれぬ扇うり　紀円
暑にのぞむ風の小賣や扇賣　照月堂魚漣
花をまつ身や末ひろの扇うり　雨巴
一軒で日をくらしけり地紙折　一調
凉しさを手折の風や扇うり　思靜
山里はあふぎ入らずや冬籠　東榮
夕貌の門なたがへそ御影堂　寥和

豆腐賣　素麪うり

鶯や門はたま〳〵とうふうり　野坡
豆腐屋は水が第一ほたる哉　貞佐
松茸の恩に預る豆腐かな　乙由
豆腐賣の呼聲しぶる霜夜かな　谷水
明がらすこゞへる聲やとうふ賣　世田谷　和雪
とうふやの起て朧の月見かな　柳隣
捨る戀ある時は戀し夏豆腐　寥和
かけて干す三輪の麓や糸ざくら　佳節
素麵の白さやひるのあまの川　抱村
そうめんも秋はてられて悲しけれ　寥和

鹽賣　かうぢ賣

しほうりも辛き目を見る寒さ哉　梅是
雪そらや塩うりの手のおもしろき　蕙菁
塩賣の手からはたくや橋の霜　水巴
しほ賣の吾妻からけや歸り花　尾谷
しほうりのたごも濕るや五月空　一尺
秋寒し塩荷の連るゝ六浦道　寥和
湯島奉納　花見や麹屋殿も老まつも　甘谷
室咲や糀むしろのふところ子　秀谷
道ニ逢麹車ロニ流涎
糀屋もあまさけごろやもゝの花　文尺
室咲をゑびらにさすや糀うり　寥和

すあひ　藏廻り

秋の日やすあひくれ行烏丸　隨意
鹿馴るゝさらしすあひや塗足駄　佳節
鞦韆の戯れとや見ん布ぶくろ　路道
水鳥の顔靜なる牙婆かな　寥和
淋しみを押賣する駄かんこ鳥　活膺
藏まはり年の鑑や拂ひ物　寥和

枕賣　疊さし

鴈がねを頭とやおもふまくらうり　欣穿

誰蚊家に賣人ふたりか枕かな　五丈

若草やねよげに見ゆる枕うり　里牛

晝寐よの鐘も日長し枕賣　寥和

けふよりも眞菰に恥よ疊さし　沾徳

引糸に蛙なくなりたゝみさし　尺子

青みたつ備後表も霞けり　黄英

糸遊の手からもるゝやたゝみさし　芳尺

青柳や糸くりかえすたゝみさし　里牛

春の日も打うたふ日やたゝみさし　雁洲

年浪の青海原やおもてかえ　寥和

暮露　通事

かげろふや虚無僧通る窓の前　廣滯齋寸龍

こも僧の若き姿や竹の春　尺子

虚無僧の浮世はかぜの柳哉　盧雪

巣籠りやうた（訴）ふかどくやま櫻　和圭

紫陽花や白も浅黄も暮路の伊達　女可代

寺を出てこも僧二人やまさくら　峯和
唐歌に花咲せけり倭假名　桃兆
うぐひすの歌に昔の通事哉　文尺
紅毛に口動かすや江戸鑑　白抄
夏旅や象に通事の呵り事　峯和

筏士　椹ひき

筏士の裸を安き角力かな　不卜
いかだしの笠美しきさくら哉　嵐水
あの男筏に寐るか夕千鳥　山夕

筏士の寐すがた見ゆる螢かな　長流舎 呉江
筏士の鴨の中ゆくさむさかな　蛙井
筏士の涼しかるらむ柳陰　珠龍
筏士や陸は手ぶりの旅ころも　遙吟
筏士のそこりになりし寒サ哉　夜白

筏士の檝に幾夜の衢哉　松巴
筏士や霜に目をする水かゞみ　万夫
筏士の枕にちかき氷かな　伴路
いかだしやけふの雪解を懐手　万尺

いかだしも布顱を掛たる寒サ哉　上州桐生　喜考
藻の華を鍋にも汲や筏乗　樓舞
筏士の一夜を蘆の花の蔭　銀砂
筏士のいてつけらるゝ霜夜哉　閑明
筏士の跡追ふて降るや花の雪　咫堂
すがく／＼し筏の上に松かざり　寥和
十三屋女の買人後の月　佳節
櫛挽の笑ふや鴨のそゝけ髮　東風
手心に啼や櫛屋のきり／＼す　田女
あつらへのくしもそよぐや夏柳　寥和

瓦燒　笠縫

梅の咲わきにすゝどし瓦燒　一歩庵　千里
花鳥や縫てふ笠の入り仕事　茂井改　桃蹊
笠ぬいの里や手つから田植うた　鳥羽　塩塵
瓦燒煙は低しあまの川　蟠桃
（御影詣）あつらへのおめこも近し瓦ふき　寥和
蓮の葉や聖靈達のかくれ笠　貞徳
市人にいでこれ賣らん雪の笠　はせを
笠縫も晝から休めはなの雪　癡狄

日まはりの花の笠ぬふ麓かな　和晉齋　百二
出來揃ふ麥に並ぶや笠の秋　蓼花
御地藏へ笠參らせん六ツの花　寥和

金掘　水かね掘

山吹はやまにも捨ぬこがねかな　憲文
草の露ゆりよせて見よ只の水　作者不詳
金ほりやなを行／＼て千鳥聞　玉榮
金掘がすてたる山の松に月　馬光
金ほりの闇（くらき）を出てほとゝぎす　金舛

かねほりの眼は休まれず菊の宿　踈蓬

時を得て蓬にも咲や金銀花　文笑

かねほりやつなに取つく銀眞桑　其木

金掘も穴を出たる彼岸哉　上州桐生　青里

金掘やあたゝかに寐る雪の暮　仝朝

金ほりや煙草きらして秋の暮　大輔

（滓）かねほりや山口しるき春まちぬ　葉五

さみだれやなほ日に踈きこがね掘り　卯雲

金ほりもわが一日やとしの市　歩東

ひいやりと蓬にあたるや秋の音　大室

たのもしやかね掘やまの高笑ひ　寥和

水かねは斯は掘られじ蓮の雨　里百

葛の花水かねほりの笭なれや　寥和

追加

水かねの戸樋をこぼれてこほる哉　茂林

苧賣　綿うり

夏引の其麻むすぶ襷かな　木司

髮置や苧に尾をつける賣詞　雪麿

花形にしらべの艶やいづれの苧　淀　等文
紡績の窓や苧賣も秋の聲　寥和
箕に干て窓にとぢふくや綿の桃　孤屋
綿打の是も花より朧にて　咫堂
わたうちの窓は雲なきふゞきかな　千調
綿うりに化しても白し紙帳賣　寥和

ねぎ　かんなぎ

冬ざれや禰宜の提たる油筒　落梧
留守のまゝ荒たる神の落葉哉　芭蕉

禰宜達の馬も白いか神むかひ　世田谷　雨眠
門寒し高天原か麻はかま　寥和
おもしろき神樂乙女の化粧かな　望一
むつかしき拍子も見えず里神樂　曾良
ふるかれや神樂拍子に神樂聲　路通
駄賃馬に夜は明にけり里神樂　和尹
ほとゝぎす神樂の中を通りけり　玄札
氣色あり顔見せ月の雇ひ神子　寥和

炭燒　小原女

かた炭の崩れかな身のなる行衛　湖春
すみ賣や宿に一ッの明き俵　心流
すみうりのおのが妻こそ黑からめ　重五
すみ賣も一重櫻のあるじ哉　野水
水仙に炭あつかひし手なふれそ　一晶
すみやきの工夫は翌の山路かな　長梢
人ありやかゝる山にも炭煙　心牛
すみやきの鸞刀おしみする木立哉　一擧
枯薄花にわかれて炭だはら　大鶴
すみ燒の手をふく草も烟かな　連尺
すみ燒を恥しめたり雪の軒　寥和

漢和半歌仙

炭竈焚鹽雪　水和
のこる冬木もまばらなる郷　栗橋住　仙閣
一文錢挾耳　連璐
百兩判挈亢　仝
ありくと月の數る淙　仙
椋も木賊もみな露の琅　水
朝霧の晴てまばゆき淺艸寺　連
危老二階襄　水
蜘拂除篁箏　仙
鰒持來大觴　仝
かいどりにかくまはれたるかくれんぼ　水
客へ笑顔をくばる小娘　連
盆上研凍餅　水
錐坑流水糖　仝
燒付るたびに田舍を自慢する　仙
月も際なく狂ふ青楊　水
鋼師側花陶　連
のどかに咄すつれの中芳　仙

小原女

一とろにあわせになるや黑木賣　其角
柴うりやいてゝしぐれの幾廻り　闇指
大原女の力の外やけふの雪　不詳作者
小原女の牛にかぶさる落葉哉　生花
蕪の葉や大根に似たる言葉つき　春里
小はらめの牛とぬればや初しぐれ　雪川
我ものとありし晋子の句にすがりて

はつ雪の黒木に輕し懐手　銀枝
木がらしや小原を出る髪の上　中村氏　東流
九重の雪にはづかし黒木うり　風葉
小はら女や頃も師走のれん木賣　東籬
小原女やむめ折添てとしの市　一和
はつ雪をみやげにはこぶ黒木うり　致曲菴
其角　藪入や牛合點して小原まで
冬の日や牛合點して小原より　寥和

立君　辻君

夕顔のおぼつかなくも化粧哉　文國
たちあかす君がけはいや秋の霜　笠翁
たち君や行も歸るもわたり鳥　蛙井
たち君の小松にしのぐ時雨かな　遊之
立君のあはれを知る賊千鳥聞　小田原　丹志
たち君は何買ふて居る雪あかり　志友
立君と思へどうれし時雨の夜　和柔
たち君の常の顔見るしぐれ哉　柳枝
たち君のあやなく白し梅の花　一尺
立君もたのしみけらし雪一夜　文尺
朧月夜にしくものもなし柳原　可圭
立君のゑりへしぐるゝ柳かな　斗南
てうちんで見らるゝや辻の女郎花　笙和
たち君のよも更にけり橋の霜　寥和
立君の夜寒も來たり居待月　柳隣
つじ君のやどり定ぬしぐれ哉　サハラ　米碩
つじ君の草に倦れて冬の月　欣宇
つじ君に涼みながらやかくれんぼ　路道
厨子君の朝も佛のわかれかな　寥和

樂人　舞人

笙の音の自然〳〵に肌さむし　越谷千鳥

翆がねは我を舞つゝ紅葉の賀　沾淵改合沛亮

舌になる蘆も年貢の數なるか　寥和

舞人に幾度指を折にけり　荷兮

吹風に舞の出來たる小蝶哉　出羽重行

（上五『續猿蓑』には「風吹に」とあり）

舞人の袖ものどかや日の光　柳隣

感應の風に動くや烏甲　舊馬

ことぐし舞茸かりに烏甲　寥和

草履作　ゆわう箒賣

華踏むも生のうらなし草履哉　長治

時雨ふる奈良や草履のうらおもて　祇口

足輕のこゑも長閑や江戸ぞうり　寥和

拾得は箒なりけり寒牡丹　貞佐

其つもる初雪かはむ箒うり　氷花

水木辰之助に初參會の時挨拶

煤はきや諸人が眞似る鑓おどり　其角

木がらしや老を養ふ箒賣　小田原花外

秋の田のおもかけ賣やみごはゝき　長孝

元日をゆわら箒の朝寝かな　寥和

木こり　草刈

痩牛に柴付て秋のすがた哉　調柳

實躰に見ゆる木こりの頭巾かな　佐原青々

花見むとさくら覺えて年木樵　笠間孤遊

柴人のやすめばすぐにかゝしかな　水戸低哉

猿の子を愛して居たり年木樵　越谷千鳥

凩や峯に木樵のつゞらおり　柳隣

雪ほどは木を伐残す山路かな　寥和

いたゞける柴をおろせばあられ哉　宗之

草かりやかりにもすだく鬼薊　芳心

骨柴の刈れながらも木の芽哉　九兆

草かりのいつしか夏に成にけり　玉榮

くさ刈の濁して通る清水哉　溪翁

草かりの鎌の刃を引螢かな　不正

草かりの鎌や背中に夏の月　又尺

草刈や身柱(ちりけ)の上のきり〴〵す　白鷗

朝すゞの間を草かりの小唄哉　柳隣

草かりや笛でくらはす牛の尻　活々

くさかりや歸る小坂の月の笛　風耳

辨慶が扇ほしいか草いきれ　木雪

草かりの御家流とやかぶつきり　未醒

草刈の戻ればまねく尾花哉　寥和

びわ法師　女めくら

目に見えぬ風は座頭の涼哉　宗静

新琵琶はたゝそげ〳〵の時雨哉　氷花

何人のもどす坐頭ぞ小夜しぐれ　珪琳

びわ法師てうしにのせる落葉哉　景湘

春まつや別當の坊のびわの音　寥和

初むまや琴柱に並ぶ稽古宿　二世調和

紅梅やりんと親ある琴の音　喬谷

てうちんで瞽女の送りやけふの月　茶外

狂ふなよ冬のしらべの松の聲　旦調

いとゆふや女めくらのしのびごま　草也

雨のはな淋しや瞽女のうしろ帯　寥和

繪師　冠師

朝がほは下手の繪にさへ哀也　はせを

（「いつを昔」には「嵐雪がゑがきしにさんのぞみければ」と前書して、中七「下手のかくさへ」とあり）

大和繪のまとすくなき柳哉　仙鶴

時雨行やまや繪書の筆のさき　小田原 巴丘

雪の日や繪師の胡粉の解合せ　深川軒 仙子

燒筆の山は淋しにゆふしぐれ　晋如

干す繪絹一枚づゝや菊畑　笙和

土佐流の花は千枝を元木かな　寥和

冠着てあたまと知れし厚ふすま　　野水
業平を女につくる菊苗や　　馬勃
冠師の心に厚き牡丹かな　　友以
玉の春たまの仰もかうむり師　　寥和

けいばくみ　角力取

落たるがとに目だつや足揃へ　　嵐雪
くらべ馬持になるといふ事はなし　　玉芝
くらべむま神の科かは負のかた　　周木
松風や天窓は暑きくらべ馬　　錦綉園

あふちの木の古路もあれば
ゆめさめて競馬はあとの祭哉　　文市
くらべむま冠の紐のゆるみけり　　荏祥
火消にもすがたありけりくらべ馬　　寥和
むかしきけちゝぶ殿さへ角力取　　芭蕉
角力とり並ぶや秋の唐にしき　　嵐雪
都にも住まじりけりすまふ取　　去來
つねぐ\は後生願ひや角力取　　史邦
わが宿へ負て歸る歟すまふとり　　前　白雲
見合て妻の諫やすまふとり　　魚貫
根津鈴鹿根や分そむる深見草　　正與
七ころび八起也けりすまふとり　　秋社
前髪の秋を惜しむ歟相撲取　　露計
翁の句にすがりて
雪ならはころんでも見よすまふ取　　陶巾
褌は殿のちからやすまふとり　　學遠
足あとに女有けり辻すまふ　　沙文
痳すがたの淋しや雨のすまふ草　　柳隣
一人して年の歩みや相撲とり　　寥和

べにとき　鏡磨

春風や紅はく鄽の上りはな　柯木

寒紅の一はけさくや藪椿　沼津驛 同波

何にこの比丘尼ふれけむ寒の紅　寥和

人も見ぬかゞみの裏や梅の花　芭蕉

（此句「己が光」には「人も見ぬ春や鏡のうらの梅」とあり）

うす霜の眉毛もしらむ鏡とぎ　萬井

花の顔梅酢に知るやかゞみとぎ　和葉

見よや見よ月はますみの鏡とぎ　憐松

鏡とぎおのが貌見ぬ師走かな　指水

玉の汗ふんだ鏡に骨や折る　五明

むら雲の月を拭ふかかゞみ磨　萬秋

水かねのしまつも寒し鏡とぎ　寥和

藥師　陰陽師

うづき來てねぶとに鳴やほとゝぎす　（宗鑑）守武

代脉やころびて歸る雪の朝　臥蒿

枇杷は黄にいそがしぶりや和氣丹波　沾鱗

糸脉を見ばや柳に風の朝　馬齋
連にして旅の力や香薷散　白猿堂　和圭
繪馬醫者のいとゞ目立や神無月　沛雨
藪椿玄的は古き名也けり　寥和
陰陽師身のうへしらぬ時雨哉　葛三
身のうへは何と定て神送り　京南居　律山
桐の葉は墨付わろし星祭　石膓
歳旦も序に買はん年八卦　寥和

文者　弓取

空蟬は唐の歌にもかくとなん　德入
般の月心斗の分限かな　一雨
右所中は人の名歳暮苞　寥和
貌見せはあたらずしかも弓はしめ　冠里
歌軍文武二道の蛙かな　正章
おもだかや弓矢たてたる水の花　素堂
むかしいつ武者六七騎門の雪　沾德
得手勝手與一は扇射さりけり　白峯
義經に辨當はくれ春いかに　貞佐
もの丶ふの紅葉に懲ず女とは　秋色
元日や二日は月の弓はじめ　宗瑞
照月や儀にけだかき星かぶと　沾吏
賴政の手心いかに雪の竹　楚望
鬼の名の薊も切ん鈴鹿山　東風
弓とりや急度明六つ門かざり　立羮
弓勢は蛇の手を取雉子哉　万旭
若武者の中につもるさくらかな　笙和
日にやけて弓とり立やねむの花　隣玉川　三入
弓取も鐵炮取やねらひ狩　兆賀

ゆみとりや七日八日の月を友　重丈
弓取の數にも入し案山子かな　小田原 居川
引ばよる放せばのびる柳かな　欣洲
彼石に苔の花さくや泉岳寺　寥和

放下鉢叩

回文　六句
河骨やきさまのまさきやねほうか　古白雲
竹の子なくばはくなこの下駄　寥和
照れはきた南はみなみ瀧はれて　同

才覺咄し品は公界さゝ　寥和
來つる供やとひの人や戻ル月　ゝ
柘榴の事をおとこのろくさ　ゝ
我家より樗のかげの廣さ哉　欣子
稲妻に袂を文の樂屋かな　女　花虹
散花を綾に織込放下かな　寸龍
涼風よ崩して見せよ雲のみね　寥和
瓢箪の内も空也ぞはちたゝき　貞德
長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき　芭蕉
娵入の門も過けりはちたゝき　許六
世中は是より寒し鉢叩　尙白
こと〳〵くねきめは寒し鉢たゝき　其角
（此句中七「五元集」には「ねさめはやらじ」とあり）
一月は我に米かせはちたゝき　丈草
幽靈に水呑せたか鉢叩　尼　智月
今少年寄見たしはち叩　嵐雪
鉢歌に物うき老の寐覺かな　笠翁
曉や尻尾を見せて鉢たゝき　壺龍
聲寒し竇も己もちやせん髮　欣堺

墨衣雪にしらけて鉢たゝき　曉雨
寐てきけば猶哀也はち叩　佐原 袋中
淨土への近道見よやはちたゝき　亭牛
若竹のちやせん一ふしはちたゝき　憐松
嶋原の竹の青さや鉢叩　金幣
星なれや西へ入町聲寒し　田社
爪さきの覺なき夜や鉢叩　鳧眠
狼の送ル夜もありはちたゝき　經祥
七墓のめぐり仕廻や霜の聲　可圭
鉢たゝき取あげ婆の跡や先　寥和

山法師　奈良法師

五月雨や水にごるかも山法師　沖而
さゞなみや鎧の下の更衣　米仲
芳野ともさくらに意地や山法師　東風
煤掃の出立栄ありやま法師　寥和

いにしへならの八重櫻を、上東門院九重へ移し給んと有しに、衆徒甚惜み、强て訴ければ、却て花をおしむ風流を感じ思召、其まゝをかせられ、櫻に庄園を寄られけるといへり。

强訴訟とつとほめたり八重ざくら　桃兆
三日月や鑓の師匠の罔兩　祇丞
法師原氷にすべる般若坂　仙泉
八郎が扇でさすや奈良法師　寥和

念佛宗　法華宗

雪と消し跡の光や彌陀如來　貞德
散花を南無あみだ佛とゆふべ哉　守武
我家の佛尊しかみな月　任口上人
居風呂を振廻れたる十夜かな　史邦

あさがほの阿の字忘るな南無佛　珪琳

日ぐらしや羽織揃ふて夕念佛　東國

黑谷へ獅子が谷から牡丹かな　長孝

雪折を起して行や寒念佛　貫明

寒聲をつかひならすや歌念佛　鳥左

本爲凡夫兼爲聖人

文盲な人ぞ尊き法の春　祇明邸頓心

狐釣宿は窓なし寒念佛　羊素

蕎麥の湯に舌のまはりや寒念佛　水府遊鱗

甲城の南、寺家といふ町はづれに、いかにも古き物斗商ふ店のすみに、彌陀如來と書たる額あり。大さ尺にみたず、箔の文字もいたく煤けたれど、さすがに御佛の光殘りてしたはし。僅の價やりて我物と思ふもおかし。彼塵ほこり打はらひ、草庵の西の小窓にかけたり。折から刈とる麥の秋風も西より來るなるべし。能結緣し奉るとやがてこの窓の名として、明くれお念佛を申さんと嬉し。

麥秋の風も西ふくや彌陀の窓　黑露

念佛講に入ては死なぬが損なりと云

うかめ〳〵念佛講の錢も蓮　寥和

深著世界無惡心

つとめよや親もあたらぬ巨燵哉　嵐雪

又わか菜我は身延の奥を見ん　敬雨

（御影講）

かた言（こと）のおめこも同じ佛哉　水國

妙法の明るき山も一夜かな　蟬話

起かへる身延は寒し十三夜　水語

ちりはめむ未を身延のさくら苗　可速

うぐひすやよそめもふらず藪の中　隨之

八宗の中の堅みや法の華　吹笙舍子鳳

元政の軒も光るかおめいかう　寥和

禪宗　律家

西ふくは達磨の息か秋のかぜ　貞徳
何もなく我頭陀袋夏はらへ　澤菴和尚
一葉ちる喝一葉ちる風のうへ　嵐雪
食堂に雀鳴也夕しぐれ　支考
禪林の松の落葉やかみな月　凡兆
こがらしや夜の落葉に明やらぬ　李下
我日には師走八日の空寒し　杉風
禪林の苔を秋のさくら哉　百里

享保十四酉年四月象渡る
初に見て象先和尚我を折られ　古白雲
ぶんまはし眠て居ても月まどか　常仙
貯ぬ僧のけしきや石蕗の花　笠間　得秀
達磨會やあふらけの棒くらはせん　默齋
山ざくら呂の花や無一物　五滴
蠟引の袖に悟の暑さかな　有佐
煎茶に霰ふる夜や江湖寮　和葉
冬枯のはせをや禪の心もち　秋社
寺にめてゝ木魚に悟る落葉哉　白浩
小便に行も放參かんこ鳥　寥和
菊の香や藥の名をも西大寺　寥和

山人　浦人

ほたる火や妥おそろしき八鬼尾谷　長崎　田上尼
山人の蕢蕨を縛れ蔦かつら　加賀山中　桃妖
鵜鳴て雲に露ある山路かな　學白
たちつけの革なやぶりそ棘の花　茶酒隣　昴和
山人の捨し謐や霜ばしら　和風
山人は貧しからざる木の實哉　梧尋

やま人の赤い物喰ふさむさかな　栢莚
山人の馬酔木の花や幾曲り　故一
やまびとの晝飯埋む落葉哉　甲州東和
山人や是もぬふてふ雪の笠　和葉
山人や蜜柑でもなき手折もの　青湛
三月のさくら見ましや深山人　寥和
雁がねにゆらつく浦の苫屋かな　馬莧
こまりけり浦の苫屋の秋の暮　一鐵
こがらしの果は有けり海の音　言水

見渡せば詠れば見れば須磨の秋　芭蕉
浦人の秋のねざめや日和占　水戸 苦夕
うらびとの簑猶重し二時雨　敬亭
目藥や明石の濱の春霞　門勝
浦人の旭にぬるゝ汐干哉　仙路
須磨人を何になれとやかんこ鳥　寥和

馬買う　皮買う

嘶や池鯉鮒の市の小雨がへ　露月
幸やさくら咲野の馬買う　文尺

手拍手で直乞濟けり菫はら　麥夫
馬かひの年の尾ひれや酒肴　窒和
下タ馬の地道も寒し雪の中　可圭
前金や春たつ旅は太夫黑　知圭
皮買ふ奇麗に料れ藥食ヒ　又尺
こがらしや宿とる門を皮買ふ　宗孚
子灯心片荷に太皷皮買ふ　窒和

職人盡附錄

春之部

歌仙

職人の雪駄のをとやむめの門　窒和
わらべこゝろのたるむ七くさ　一尺
鶯の聲を二階へ及ぼして　咫尺
南そよ〳〵起〳〵の空　氷尺
あり明の月も行燈も消殘り　可圭
ならにさくらに染るまち合　尺子
ウ遠く近く淋しき秋のほらの貝　又尺
ひくにの船の綱手かなしも　雪鷹
去程にてには揃はぬそらゝらみ　里百
初奉公の月もおぼろけ　東風
お花見はいよ〳〵あすか〳〵山　和風
ころは着(きる)もの一ッでもまた　如尺
弓とりの的の賭袋し（不明）□　万旭
雪もうす〳〵越後屋の傘　笠翁
小原女の牛は牛つれ大根馬　笙和
刀くはへて多賀からの札　白杪
尺八のちらりほらりと籐ごし　和葉
ニオ大工のあたま數に三吉　和柔
奉加場へ晝寐しに來る鳩の杖　夜白
ましら〳〵とさるすべり咲　女可代
半日の連にはなるゝ瀧の音　志諷
戀しき時は嗅で見る文　十丈
三ッの津を遊びはけたるまめ男　万秋
やりての字(あざな)ならばよくとく　文尺
法華とはみす〳〵しれる額かまへ　豐水
とかく戸塚に泊る足もと　連尺
山彦の返事も待ず定使　万井
迷子たづぬる鉦も木がらし　木雪
ひつそりと更にたりける薄月夜　柳隣
貧乏小路うそ寒き窓　路道
ニウ松一木冬の隣を預りて　東和
主のこゝろに似た太郎冠者　芳尺
合羽から衣の袖のびよろ〳〵と　南林

藏にてあきなひ仕ゆ　來賀
眞黑な柱に根繼花久し　勗和
百囀りの桃のさへずり　佳節

新柳

一すじもあだにはたれぬ柳かな　雪中
樋の口へ風のこぼるゝやなぎかな　又尺
纜の跡にやなぎの雫かな　柳隣
むめ咲や餅にも咲の二三りん　馬光
うぐひすのどちがはつ音ぞ二子山　芳尺
苗代やみの毛に鷺の降る姿　又尺
陽炎のひかれて燃るつゝじ哉　閑齋

いでやけふの佳節に鷄をたゝかはしめんも童べらしく、又桃林に遊ばゞ牛にひとしかるべし。いざやといふまゝ尻つまげて、酒壺を肩にし杖を引てはる〳〵の平塚飛鳥山をくだりて瀧野川に至りてたよりよき所にむしろをしきまうけて、たゞ日のかたぶくをおしむ。

盃や流れて雯に岩つゝじ　馬光

田家

灰小屋は旅おろして柳かな　宗瑞
しだれんとおもふて居るかさし柳　寥和

久しく飼ふ猫あり。春ごとに子を四ツづつ生り。ことしも左のごとくなりしに、友ねこの來りて皆くひころしたり。その悲しむ聲人にも越つべく覺へしが、程なく又夏子をなせりけり。此たびはみなわづらひて死たり。さあれば春夏に子を八ツ失ひたり。人ならば尼法師にも成べき身の、その夜に二階より鼠くはへて出たるぞ淺まし。

戀すらもわすれはやさよ猫の母　寥和

佛滅日に雪ふりければ

ねはん會や麥に藥の雪がふり　東風
はつ午やたまつても居ず法華寺　寥和
藤棚やぬすめば叩る水かゞみ　ゝ
花に人麓の蓮は錢もなし　黑露

夏之部

卯の花やそら〳〵しくも鳴鳥　柳隣
うの花や笠縫ふ膝の時明り　木雪
卯の花や明かり過たる草の庵　寥和

さらしなにて

田植歌伯母もお婆ゝも捨られず　文尺

歌仙

花守の家は若葉に隠れけり　東風
二月三月四月朔日　笙和
水さしに見ぬ唐士をそめ付て　路道
たが物ずきしあるへいの嶋　木雪
十六夜や脇本陣の古ゑの木　笙
藪も垣ねも匂ふ掛稻　東
此秋も年預太夫のにこやかに　木
盞する椀へ打まける蕎麥　路
いとしげに住寺の留守は鬼の留守　東
頃しも風の落葉月かな　笙
行德は須磨にをとらぬ鹽けぶり　路
鷄まいらせて神をいさめん　木
青物の片〳〵に熨斗提て行　笙
お端女(はした)衆はどれも氣がるな　東

蝌の月寐たい願ひの人はたれ　木
宵に尋ねた伽羅がふすぼる　路
ゑぼし着し迎も交る初瀨寺　東
椎の下枝に杣の手ぬぐひ　笙
栖と思ふ兵法つかひひだるがり　路
あの耳たぶへ米が乘げな　木
唐紙は澤山さうに菊と桐　笙
朧〱夜の明る梅澤　東
橙は葉陰に青く若かへり　木
おろすあふぎに新しい風　路
兄よりも妹は膳所によい奉公　東
としが十九は死さうな年　笙
水入の鷁もひとつは淋しくて　木
兕腕をく御所の緣先　東
汲かはす酒も泉か三ヶの月　路
爐もぬるでも色に出にけり　木
わたる雁むかしは文も屆けたに　笙
八反掛の命知らずめ　路
たゝき制鞘もおそろし源吾兵衛　東

舟あたり合ふ風の福島　笙
花さかり城も九輪も和らきて　木
蝶〱もまた笠をぬふてふ　路

道灌山は太田入道の居城の跡なるよし申つたへ侍れば

兵粮のこぼれてや今麥の花　東風
きのふ花けふは葉櫻飛鳥山　ゝ
風をまだしらぬばせをの若葉哉　尺子
よし垣の猫のひたいにわか葉かな　寥和
物おもふ車のもとの水雞かな　連尺
一聲で闇の夜はなし郭公　志諷
梢みな青山赤坂ほとゝぎす　寥和
夕すゞみ燈すや岸の花ざかり　夜白
夕立やまだかはかぬに蟬の聲　又尺
たれも斯寐た昔あり枕蝌　白杪
武者ぶりを妻に見よとや土用干　一尺
松風に管絃する也山のせみ　馬光

鳴立澤にて西行上人の杖を拜し奉りて

夏きくや屈かぬ迄も力竹　女可代

夜鰹の船のどめきや星月夜　如尺

生ふねの鯉の物すまし顔に尾鰭うごかしたるも淸らかなり

生鯉の鬐もそゝげず凉しけれ　寥和
池を出て抹香くさし蓮の花　路道
つる〱と日出度蓮の旭かな　和葉
明六ッの鐘をこぼすなはすの露　雪膺

溽暑

高すなによる浪やけるあつさ哉　沾洲
心つよき人は日ぐれの暑さかな　寥和

薫風自南來

北風もかほるばかりぞ緣のはな　寥和

秋之部

むすび置鳴子や窓も一人役　馬光
星合や面かはりせし御祓川　寥和
秋の蟬衣わすれそ三保の松　鵑翁
秋海棠唐のをんなのすがた哉　佳節

良夜

照る月に若過たりし姨の顔　黑露

名月や呵られもせぬいわし雲　可圭

蘆の葉や横に流るゝ月見船　笙和

延享子八月十五日の夕日ほがらかにして、こよひ清光ならん事を知る。かねてしか〳〵といひける三四子と小舟をうかめ、先三叉口に押出すに、業ならぬ人の網打あり、簎おろすあり、いづれもこよひのもうけならんとおもへば心なしとも云がたし。都て此川の邊のけしき常の夕には似ざりけり。まいてよしある御方の御別墅なんどは嚴重のよそほひ也。又待乳の山根に急ぐ小舟あり、是も捨がたし。兎角して日もくれなん頃三めぐりに着く。頓てはひ上りて見れば、夜はゆきゝもまれ〳〵なれば、岸上に筵をのべ、酒肴やうのもの取ひろげたるは、人もなげなるふるまひなるべし。月はからびたる森の上に滿ゝたり。林棲見鳥毛といひしもこよひのごくならんとをの〳〵口號。

名月や柳も白髪梳くべし　寥和

船蔭の月を見めくるこよひかな　志諷

墨色の森の深さやけふの月　木雪

名月や柴を積んでもたから船　長孝

鐵牛の太鼓鳴りやむ月見哉　佳節

又船に乗て金風銀波を漕もする

初夜後夜を男ざかりや月こよひ　寥和

稲妻の唐黍わけて月見かな　鳩光

重陽の日伊勢に遊ぶ

柊赤いわしさす除夜の軒は常にして、又榊飾るこそ目出たしと見るに、猶とりも捨ず。年中立つゞけたる門〳〵の姿も、神代ふるき習しにやと尊し。おほやけには今日葵に菊をとりかへらるゝときくに、

榊葉やとりかへもせずけふの菊　黑露

秋色

虫も機織ると聞しか野の錦　圍齋

錦着る野山の中にからしかな　東風

唐松に二すじ三筋蔦の秋　柳隣

寐がへりのうつゝに交るきぬた哉　万旭

いつの間に來て居る事ぞ小田の雁　雪中

冬之部

水仙や又格別な葉のひねり　黑露

霜の中にさく事奇也つはの花　里百

規矩庵を修復せし時

やねふきの終には下りる時雨かな　寥和

新しき傘に嬉しきしぐれかな　路道

琵琶抱てつきなき聲のしぐれ哉　一尺

驛路

江戸を出てけふ三日の月不二寒し　寥和

鎌倉七里が濱は行程四十町斗に覺ゆ。いかなればいふぞと尋しに、當浦の者申す、六町一里也と。

しぐるゝや唐の七里の濱づたひ　寥和

稲むらの風を休めてしぐれかな　白杪

宮様のさくら橋むらしぐれ　万尺

牛嶋の邊りに一夜泊りして

近づきの鐘も氷るや川むかひ　寥和

お霜月ほとけ〳〵や夫婦づれ　和柔

亭ンで見しはもし此雲か初時雨　菴藝洞 南林

はつ雪や折〳〵傘をすぼめけり　ゝ

盗めばやちからも募る大根引　ゝ

ぼうふらは年を取らんと思ふかや　前 東潮

としの矢を請てお見やれ螢火丸　白雲

一ッ脱キふたつぬく夜や年わすれ　可圭

年浪やよる〳〵削る花かつほ　柳隣

としの夜や一筆書の太神樂　寥和

五六十年を賣たしとしの市　八十三歳 笠翁

職人盡執毫

龍水
路道
柳隣
可圭

附錄

鳩光

後序

凡百工の成れる事つたへて久しきにや、やゝ霞たつ山の端よりそらのけしきもにほはしく、窓に影さすうぐひすも、筬とる賤にひやうしをそへ、何くれとなく春も過て青葉の翠簾の懸かはりたる、鶉啼野の深草は土器にも露はほしあへぬぞかし。炭焼小野の里はけふりの行衛だに猶寒かりき。すべて四時の民の手業これにしもかぎるべきかは。さればその品をつらねたる古き歌合の侍りしを、いまや萬里亭の物ずきによりて、狂句に一轉せられしかば、さびしくもあり、おかしみもありて、まことにもてあそぶべきはこの一帖にとゞまれり。と珍重して筆をさしおくのみ。

雲萼巣馬光

延享二乙丑年 仲夏上旬
梓工 吉田魚川

職人盡誹諧集後編發題

延享きのとの丑の夏、萬里亭のあるじ、職人づくしの前編を作る。その風流古雅のすがた詞今世に翫ぶ所也。職や誠に上王侯の尊きより、下鄙賤の下々の下の事わざ迄、職分の離るゝものなし。彼深くさの野に啼すてし一聲も、身にしみたる夕邊なるを、旅する鳥の北斗の前に横たはるなど、あるは山のもみぢの色こくかつちりゆく、ちりやちりとも鳴通ふ夜ころには、其關守のねざめも哀なるべし。いつか人めすら枯はてたる中に、水仙の清げにひとり茶室をうれしがらせ、又寒菊のかしこげなるに、はや室の戸に咲そめしより猶睦月のにほひ深かく成そもて行、白のよき、紅のなつかしきのに、春は月日ほしとさへ啼うつる色音こそ花鳥のしよくなれや。此外のはなの垣ねにしてのたおさを朝な〳〵なき過るに、是等げに勸農の職なりけり。されや飛脚は馳行を以てし、禁足の僧は林下に止靜して出ず。森羅万象いづれか職とすといふに洩んや。此職を大成して後集とよぶも、俳家者流の職にして、爹叟は爰にこれをわすれざらしむるの職叟也。と其あらましを僅に綴るも亦さし當ての職人ならんと、寛延改元戊辰の秋草の庵崎の旅屋にするがの黑露發題す。

帯賣

姫松の帯か腰まく藤かつら　宗鑑
白雲の天の原帯土用かな　望一
帯ほどに川は流れて汐干哉　沾徳
おびふるしいまだ旅なる衣更　一有
帯賣の瀧落すなり初あらし　祇梁
おび賣に呼戻されて藤の尺　雨橋
うり買にならぬえにしや常陸帯　有佐
さけ帯の〆ちからなきあはせかな　杏露
おびにする霞はほそしおとこ山　豐水
帯賣や幾重に廻るはなの京　秀谷
立髪のはつ花さくら名護屋帯　寥和

白粉賣

降る雪は京白粉とみやこかな　重頼
化粧する果や啼出す猫の戀　史邦
みじか夜やまだ白粉の香は殘り　ナコヤ　一雫
出かはりやをしろい賣の誘ふ水　水戸　鯨石
箱入の雪をみやげや薬おしろい　一和
白粉にこゝろののこる雪見かな　文尺

雪の筵ひらくひじりの恵美須判　路道

京師井上長門が源氏白粉の包紙に、筒いづゝを画る事、井の字によりて也。今東武製にも互にかけを水鏡にうつして、皆長門と銘を打てつゝ井筒を畫かけり。

白粉の花摺にせよつゝいづゝ　寥和

弓作り

松の葉の弓作らせん花の春　信徳

うぐひすや弓にとまりて法の聲　嵐雪

紀の山路にて

蛇覆盆子半弓さげて夫婦連　仝

竹の子の時よりしるし弓の竹　去來

太平にゆみの月日や若和布むこ　佳風

梅咲て肩もひろいそ弓つくり　桂石

さみだれやけふも寐に來る弓作り　思明

ひいて見る雪荷の村の宵月夜　白主

反かへる弓師の伸や雲の峰　万船

弓作る夜なべにさすや三日の月　烏朝

青柳の反りを師匠やゆみつくり　和龍

押せば出る弓張月やゆみつくり　青鳩

金貝のすこししさりて弓はしめ　不尺

弓町の聲静なりとしわすれ　杏露

ゆみ町は障子に名乘霜寒し　寥和

弦賣

花瓜や弦をかしたる琵琶の上　言水

あきかぜや白木の弓に弦はらん　去來

梓弓つるがの海や春の景　重相

弦うりに近みち問ん花の里　其蔦

つるめそが蜘の威光や祇薗の會　鵑翁

つるめそが弟子等までけふひた甲　寥和

ひきれ賣

四ッ五器の揃はぬ花見ごゝろ哉　はせを

紫陽花を五器に盛らばや草枕　風雪

椀屋より手を打つゞけ神の春　沾洲

ちりうせず梅に松葉や會津椀　松遊

わんうりの年の夜たゝく水鷄かな　青祇

椀うりや蛙鳴するとしの市　志諷

わん鄽に春のひかりや年の市　万廸

椀飯のねんごろ久し根來わん　鋈和

土器作り

愛宕にて

綿を散てかはらけを待かすみかな　氷花

愛宕から土器町へほとゝぎす　珪琳

手のひらへ落葉うけたりかはらけ師　二世盤谷

土器の干かねるうへに落葉かな　蝸名

炭竈にけぶりは低しかはらけ師　子蓬

かはらけのかたまりかねし秋日より　水戸豆花

谷底にをのがはなありかはらけ師　全痴蜂改意中

夕されは野邊の秋風身に入てと詠ぜしを

かはらけもわるゝはかりのうつらかな　上總武士郡壽躰

元政の會式の客ぞかはらけ師　雅光

鶉啼深草や子も土なぶり　祗祥

おもへばや土器つくるはなどころ　調羽

白雨や干ぬに取こむうち曇り　祇風

あつき日や名も深草の土器師　園芝

土器のくちびる寒し初揚屋　鋈和

まんぢう賣

佛名やまんぢうの香の薄けぶり　洒堂

まんぢう〳〵釣のいとまも波のうへ　龜毛

饅頭は鶴に長閑し林氏　盛山

まんぢうや杖いま坂のおぼろ月　志友

まんぢうのうはさもたらず岡すゞみ　蕉渓

あん（餡）なしに象も繋がん美人草　路道

饅頭は異國の製にして、林和靖をうけつぎたるよしにて鹽瀬を根本とす。又本町にも桔梗島飼の跡絶ず。近來鈴木の風流つぼ屋の一流をはじめ、いづれをろかならざる中にも、主水を最上とす。

まんぢうや嘉定の中の富貴草　寥和

法論味噌賣

味噌大豆の煮（に）る匂ひや朧月　史邦

夕だちにほろ味噌賣のうき世かな　水戸　璘瑞

白雨を鬼とぞそしる法論味噌　露秀

豆からを焚や師走の寺の場　長梢

昔千宗易、宇治の柿入るゝ箱を以て料紙箱とし、奈良のほろみそのはこをすゞり筥と物ずきせられしより、其物のほどをたゞちに其ものに用ひらるゝ事、誠に獨歩の茶聖なりとぞ。

保呂味噌や奈良からふるき硯ばこ　黑露

はふり子のほろ〳〵味噌や神無月　寥和

紙すき

薄氷上手にすくや紙屋川　德元

紙すきのはた〳〵嬉し谷の花　琴風

かみすきの手妻や美濃に散る紅葉　好古堂　以貫

紙すきや日脚覺える冬至過　備中成羽　素道

かみすきのはた〳〵寒しから衣　水府　沾橋

紙すきや流るゝ花に春をしみ　仝　苫夕
すき出す紙に五色のはなちどり　仝　遊璘
梶の葉の秋や紙漉墨田川　嘉廷
御祓川するや紙漉ゆふだすき　栖雀
かりがねや灯のもる家に紙きぬた　敬中
心には花をさろふや芳野紙　田社
かみすきや水の中うつ小夜きぬた　松巴
紙すきの里や礎の夜のあまり　竹阿
かみすきの手業に[illegible]かな　島羽　ニ州

散(ちる)はなや塵を漉こむかみ屋川　蓮外
なでしこの花のあたりや地紙漉　万珠
すきあける紙に残れやほとゝぎす　世田谷　今之
紙漉の目にも芳野やねりの花　婆和

さいすり

帷子の四五六月のさいみかな　宗鑑
わさとならぬ葉のうら表いちこかな　青嶽
簑すりの手からこぼれつ梅のはな　露斗
さいすりよみがけや年の市のうら　婆和

紙漉　追加

しら菊や紙漉里の朝ぼらけ　砂川堂　涼翠
すき込やちればぞさくら芳野紙　伊十

回文

紙漉よ花見て皆はよき住家　其月
かみ漉に涼しさとはん窓の顔　万夫
紙すきの灯火白し小夜千鳥　野州足利　鹿如
花の香や紙に漉こむ妹背川　涼花
淺間根や爰はとろゝのはな盛　魚里
名月や雲紙すなる水てまで　丈室

新古誹諧の職人をあつめて此職人集よく調たるをうらやみて

我も戀しのぶ紙子や集の主　仝

ろくろ挽

蓋挽の兎に角冬のあはせ貝　専吟

木地ひきの酔顔見たり山の色　沾涼

夏の日や乳母が水汲む錫ろくろ　東風

胝のつれなく見へし轆轤ひき　寥和

鎧細工

坂本ニ泊りて

なめくじり這ふて光るや古具足　嵐雪

三保野矢は首の骨こそ甲なれ　仙花

清水長谷川が繪馬を見て

草摺の唯今切るゝあつさかな　氷花

卯の花のおどし手際やあさぼらけ　涼龜

よろひ師は裸でさはぐ野分かな　連尺

老武者も具足の餅に居りけり　寥和

みすあみ

翠簾かけて誰妻ならん涼ミ舟　秋色

身半分花にかくれて編すだれ　岩城　芳津

かゝぐる歟みすあみ仕舞ふ雪の暮　羊素

みすあみや竹に雀の子もち筋　水戸　遊璘

翠簾あみの夜なべ邪魔するさかり猫　栢筵

唆簾からすだれや軒もころもがへ　万船

あむみすや垂るゝをまたぬ秋の風　寸龍

風寒し旭織こむ翠簾のあや　調羽

みすあみも脂なわすれそ月の秋　秀室
春風やゆかしきたねのみす作り　万珠
みすあみやふしの間に〱横かすみ　尺子
おもしろやみすに柳の竹配り　素蔦
翠簾あみやかざして見れば片時雨　白圭
みすあみのをのが手もとや雁の空　拾翠
かほる風誰にもらさん翠簾作り　鋤之
初雪やみす屋もすだれかゝげけり　川何
戀よ猫美壽屋の妻もたち姿　寥和

唐紙師

たつ波はから紙ばかり汐干かな　夏人
からかみに水と雪との寒さかな　志諷
紅葉を惜しむ手しなやから紙師　園芝
あつらへて二尺に咲を菊の花　可圭
まつ春の唐紙帳やきみがひざ　和尺
から紙の桐も天下の秋なれや　寥和

一ふく一錢

雷や門の茶に寄ものがたり　伽香
茶ばかりときつね鳴なり枯薄　涼莵

關守も寐られぬ須磨の新茶哉　支考
宿はづれ霜消る間は朝茶めせ　如泥
連翹や茶に山吹を捨さする　巴靜
あが國の名におふ茶あり樗うけ　午橋莊　杏英
夕すゞみ橋のたもとや袖引茶　佳節
風薫る一ぷく一錢宇治のさと　琴鶴
棚はしや大和なでしこ爺が釜　水馬
うつら野や旅の飪のたちなから　硯壽
茶賣迄袷になるや大手先キ　一壺

煮ェばなの鑵子の蓋やくつはむし　如尺

一ぷくに一錢浮くやいけの蓮　寥和

せんじ物師

酒賣もせんじ茶で見よ姥ざくら　重頼

茶も月の名に合せけり後むかし　老鼠

獨吟の内ニ

どこでがな湯立初んゑき日に　貞德

のみてもあらぬ此荷ひ茶屋

虫籠に果報こそ茶のあまり水　來至

風引の雪の戸あくやせんじもの　不尺

待花や目のつく所になひ茶屋　淀　等丈

道芝や十夜御命講を荷ひ茶屋　雪麿

來よかしの時雨の雨や煎じもの　寥和

佛師

光さゝらぬ内に拜むや雪ほとけ　玄札

涅槃會やけふは佛師の惠美須講　蛙足

佛師の砥石はかなやくさの露　麥仙

法橋は山の出入ぞほとゝぎす　少我

箔ちるや佛師の膝に飛ぶ螢　叙尺

雨雪とわれても一ツ佛師かな　宜朝

箔散るや佛師のひざへ青あらし　南社

其國は佛師の屑を落葉にも　道淡

佛師とは親のから名や生身魂　寥和

經師

鶯の初音や經の一の卷　松一

とくぞ今四十九年の粘の花　寥和

まき絵師

小つゝみや蒔繪に見ゆる松はやし　方閑
あの中にまき繪書たし宿の月　はせを
なでしこやまき繪書人を恨らん　越人
梅一輪咲て天下の蒔繪哉　巴人
砂子地やあかしの月のほの〴〵と　生花
まき繪師のおもはゞ淋し秋の雲　文笑
野を見せてまき絵塗らん草の花　備中成羽　依水
まき絵師の手の油氣に花曇　何調
とぎ出しの月の光やかゞみやま　咫斗
まき繪師のこぼるゝ露の裾野哉　水戸　來由
まき繪師の心や狂ふ村紅葉　期雨亭　斐靚
光阿彌が目にもさくらやひがし山　佳境
まき繪師の紙帳を花の舍りかな　筌二
ならの葉の錦や奈良の古蒔繪　寥和

貝摺

浪の間や小貝にまじる萩の塵　はせを
とこぶしは宵の小貝や磯の月　嵐雪
かげろふや小磯の貝も吹立ず　晋子
朝鮮の貝もひろはんけふの汐　万尺、
貝摺の鞘に暮たる蛍かな　丈國
貝すりの窓を訪ふほたるかな　柳隣
かい摺の耳にばかりの師走かな　景湘
貝すりの寒さ忘れし水仙花　貞芙
後貝と見ゆる女房やわか楓　寥和

沓作り

ゆふぐれは沓につまづく乙鳥かな　風瀑
初雪やみなやどなき沓の音　山川

夕がほや沓かへ宿のまくらにも　大町
さみだれや沓の直あげる間の宿　永我
くつ作り紛れてつかむ尾花かな　嘉橋
まりほどな鮟鱇を沓となぶる也　寥和

鞠くゝり

まり子にて
くつ音も靜にかざすさくら哉　荷兮
吹息は鳩呼秋臥まりくゝり　蟻舟
永き日をくゝり寄てや鞠の音　沼津驛　同波

七夕の日を誰がはれぞ鞠くゝり　道淡
年の暮數ありや〳〵まりくゝり　寥和

針すり

藤瘤にたつるは松の葉針かな　吉貞
わたに針包むこゝろか雪の松　正直
名月や針するひざのまつの塵　夜白
釣はりに釖も崩さん鱚時分　寥和

念珠挽

幾度の彼岸に逢や珠數の艶　淙葎

珠數くりて蠅打人の片手かな　雨軒

無量壽の年とり豆や珠數の玉　咫斗

淺草や珠數屋に隣る海苔の道　豐水

咲夜半もあやなし梅の玉木賊　水馬

飛花も枯るゝも挽や珠數作り　釵尺

後の世の落葉かくなり念珠ひき　百二改　蟻道

刀豆の珠數も淋しゝ(風カ)あきの數　寥和

米賣

年たつや新年ふくべ米五升　はせを

此句の瓢は芭蕉菴の柱に掛置れし米かろうと也其後素堂

黑漆にて

一瓢重泰山　自笑稱箕山

朱にて

四山

莫習首陽山　這中飯顆山

朱にて

葛飾隱士素堂書　書判

此銘をかゝれてなを珍器となれり

今栢筵所持之　笠翁添書アリ

北濱の市は崩れて雲の峰　万珠

石町を米うり歩行彌生かな　文臙

米賣や外はあさがほの花さかり　五啓

年を經る天秤棒やことし米　一壺

米賣の道や一すじけさの雪　釵尺

新米や舟まで隣る美濃近江　尺子

雪の夜や迷子も米のはかりヾ　寥和

豆賣

せつぶんやつねは小豆を賣ながら　谷水

外と我としの豆賣翁かな　輝雄

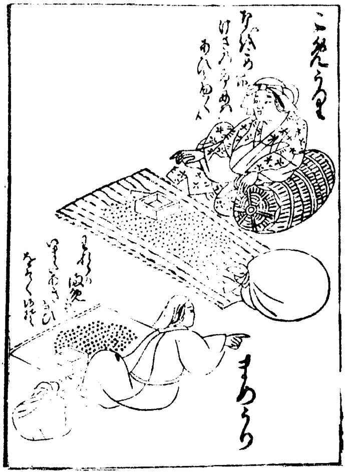
さみだれのそら豆うりや待乳山　潜魚

豆うりや一夜は鬼のかたきもち　水戸 沾璘

まめ賣に音を負るな玉あられ　友松

豆賣の輕〳〵しさよ年の關　達平

新大豆もしやが父に似ぬ俵かな　寥和



いたか

驚くや門もてありく施餓鬼棚　荷兮

瓜李罪の有なし水せがき　京 順也

報謝せんそこにもいたか盆の月　万旭

佛にもならぬ響や辻施餓鬼　寥和

穢多

穢多ならで狐かははる少かな　宗鑑

夜こそきけ穢多が太鼓ほとゝぎす　キ角

神の代を知らずや時の花見たち　白雲

明行や妙法蓮華ゑたが池　故一

虫干に信者還入や穢多が門　葉五

我犬に穢多と知られそ皐月闇　群牛

太鼓張る門邊に清しむめのはな　寥和

玉すり

君が代やみがく事なき玉椿　越人
玉摺のかはらをてらすほたる哉　半秋
草の葉のほと〳〵するや露の玉　白主
たま摺のする〳〵眠る春日かな　杉國
玉すりの痲覺も丸くとしくれぬ　水府　羅斗
玉摺よ人もこゝろの花曇り　仝　沾璘
玉すりの手本にせよと霰かな　鳥羽　巴洲
木賊から磨き出すやたまうさぎ　波道
枝梅や玉にくらべてまたをろか　芳津
玉すりや磨き上たる夏日和　都江
たま摺のこゝろはいかにけふの月　万珠
玉摺の手のくぼよりぞ月寒し　七十翁　常仙
みがけばや書中女あり雪の窓　水戸　露白
あまかはらこゝろよやあら玉細工　寥和

硯きり

菊の香に鳰も硯の水添ん　嵐雪
ありがたや花の硯の石見がた　青流

硯切蔓やするがの葡萄石　雲藏
汐干にも乾かぬ袖よ硯きり　水戸　豆花
硯きる音もたま〳〵しぐれ哉　杉國
手はしめには若むらさきやすゞり切　逸秋
花や鳥やしづこゝろなき硯きり　水戸　沾橋
いろ〳〵の花のすがたや嵯峨すゞり　万珠
土佐といふ硯屋でけふ石買ん　寥和

一もじ畫

一もじや一字の題のわすれ草　百花

葱しろくあらひ立たる寒さ哉　翁
下男水仙かりつ夜の河豚　一晶
ねぎ賣の籠輕さうな歌ふくろ　祇章
ひともじはしらねや鰒のかくしつま　寥和

灯心賣

子まつりや梅待宿の赤豆めし　山店
子祭に目貫ほり出す自慢哉　史邦
夕立や灯心うりの荷も重し　英露
吹けば飛灯心賣のすゞみかな　志諷

身のためにちと賣殘せ子灯心　万旭
書初の下繪して見ん子とうしん　寥和

鞘巻切

風さそふ梅の小たちに鞘もなし　益光
永き日はさやつき詰の刀かな　春可
節餅やこがね作りの鞘巻師　志友
鯉口のあふ夜も更る師走かな　寥和

くら細工

秋山や物もゆるかぬくらの上　キ角

荷鞍ふむ春の雀や縁の先　士芳
さくら山目に付て居ん鞍細工　葉五
春の日や伊勢の馳走のくら皆具　雪居
饗應の鞍馬は國々の諸士より結構を盡さる
高麗人にもてなしぐらや金銀花　寥和

白拍子

柳にはつゞみもうたず唄もなし　其角
宿下りの笑も露けし妓王村　午寂
大象の傾城あゆみあつさ哉　六桅 青峨
古代付合の句に
廣き世に名を取れる遊君
嵯峨の西とぢこもりたる生佛　立甫
同
舞姫の裾からそつと手を入て
靜はなく／＼出るせつちん　堺 元順
入相に要もゆるむさつきあめ　溪淵
佛出て扇露けし嵯峨の庵　也足亭 登度
夕がほや隣をきけば白拍子　祇山
白拍子また裾輕し十三夜　逸秋
蝶々も狂ひなか間やしら拍子　川越 連國
白拍子白衣になりて涼かな　仝
花とりに我身の上や白びやうし　佳節
太刀帶て媚を賣けん月の眉　桃溪改 桃兒
しらびやうし隙な手もあり小夜きぬた　嘉橋
題歌妓　狂詩一律
吉野丸花躍　歌鶯姿似燕　北陞齋 水和
橘町振袖香　遊女意如娘
流液平相國　誰知明且景
拔腰源九郎　還勝昨宵涼
秋淋し佛の景の草まくら　仝
檜扇子を柱に干すや五月雨　水樓
長刀も持たせて見たき扇かな　如尺
白拍子言葉に花の女かな　列張
名月もいさよひもしら／＼拍子　寥和
歌仙
嶋臺に扇子わするゝ別れ哉　扇和
猿の袖まで匂ふ名月　寥和
漉し水の音も漸寒うして　仝

紺屋の垣に畠少〳〵　勗和
小細工は端居の内の氣なくさみ　仝
物喰ふ馬へ横に日かさす　寥和
入相の鐘にいぼたの動くらん　仝
早稻田の町の遠い雪隱　勗和
藝もないところに是は惜しい石　寥和
八十七ではしめての灸　勗和
優婆塞も優婆夷も酒は一雫　寥和
地形のわるい飛神の茶屋　勗和
筏士の帶で手を拭く暮の月　寥和
志賀之助なし今も丸山　仝
本堂の瓦下地に稻むしろ　勗和
花にも若衆また紅葉にも　寥和
むらさきのさめるも早き男やま　勗和
八まんと云ふ事が口癖　寥和
物ずきな極樂國土世間寺　仝
踏んだ敷居をいたゞいて行　勗和
簪紙を替るばかりの節句にて　仝
かな法師殿雛立たがる　寥和
水へ浮かす繪の相傳も油花の占　仝
塵もうごかず箔置の鄽　勗和
小便の色までかはる二日醉　仝
若上人の俗はられける　寥和
藥じやと鞠をすゝめに來ては賛　仝
逆澤瀉は類のない紋　勗和
朝の月潮に魚の伊勢同者　寥和
露を抓ンで悟ひらける　勗和
癩にとんと預ける紙きぬた　仝
奈良へかゝれば麥の秋風　寥和
出るとはや錢突習ふ恥しさ　勗和
男の給仕つき〳〵しさよ　寥和
職人の顏新しき花の雲　勗和
みそし二もし皆春のいろ　寥和

追加

袖の香の流れて水木春深し　白杪
舞の手の波間を潜る衙哉　友以
韭狩やまた覗かるゝ祇王庵　東風

曲舞舞

（句）

一夜來て三井寺うたへ初しぐれ　夜白

曲のうちは辨慶いかに合歡の花　水馬

御命講の日暮や尼の居曲舞　嵾和

てんがく

手拍子の品玉にとるあられかな　重頼

綾織の白刄の上のさくらかな　濟通

田樂の我名を喰ふはなみかな　蓬谷

でんがくの新座や花の祇園串　嵾和

さるがく

里人の渡りね敷はしの霜　宗因

幸清か霧のまがきやむかし松　音子

夕くれは〳〵何とほとゝぎす　麥林

役者達奈良に居付や花の春　殘花

家に三老女といふ事あり、亡父將監秘して傳え侍りしを思ひ出て

伯母捨を闇にのぼるやけふの月　立甫

金剛の尉もさびたりかみな月　嵾和

縫物し

紅梅は誰がふれし香のそめ小袖　　前　立甫
きそ始松に柳の糸とめん　　嵐雪妻
蟬衣ぬひ物のとし歌を葉　　一守
袖へいの縫や朽葉の蔦かつら　　令徳
藤よりはさきに暮けり針の溝　　五啓
鴛鴦や水は金沙に流れ行　　馬光
上へ前にとまる葉多き胡蝶哉　　永我
縫物師出した儘なり五月雨　　珠龍
わか芝や觀音を縫ふかさのうち　　寥和

くみし

からくりの九月や花のいとすゝき　　蓮外
よりて見ん本町二丁目の糸やなぎ　　寥和

追加　縫物師

しづこゝろ素縫の菊に伊達はなし　　祇山
遅數入をうらむ戯れ男　　寥和
水〳〵と五日の月のさし出て　　來至
宵講釋をもどる一つれ　　祇山
ほとゝぎすに顔の筋違ふ座頭の坊　　寥和
色も匂ひも濃き若葉山　　來至

全　組師

姫國の春のひかりや五色いと　　來至

すり師

石摺のやうに霜置や菊ばたけ　　貞芙
板すりの手ならで足なら雨蛙　　尺子
板摺の得手に帆かけんたから船　　佳境
はん摺の咲ぬ花見る花見かな　　一尺
草花や八重菊小きく植字板　　如此
山吹のひとへや八重やあはせ板　　寥和

疊紙うり

初花の賣言葉かなたとふがみ　雨夕
行秋の夜なべひろげん疊紙　路道
虫干や短冊明ヶる疊がみ　佳節
桐の葉やたき物姫の疊がみ　寥和

つゞら作り

解にくきつゞらを春の日影哉　休甫
葉ざくらや過來し伊達のつゞら笠　一尺
ちるや桃葛籠に足駄なみだ雨　不尺

細元手くりてや秋のつゞら町　丈國
ゆくとくと君がつゞらやはるの宵　寥和

かはご作り

新遊のはりま鹿兒嶋誰か家　専吟
剃るとはや皮籠に溜る秋の暮　水馬
對子王かもぬけのかはご今も蝉　何江
虫干に皮籠もあるか國分寺　万廸
峰入の笠もかはごもそげ〳〵し　寥和

矢細工

年の矢を請てお見やれ螢火丸　白雲

沾洲點、羅浮印譜最初の句

前句　十六夜の且は袖も酒臭き

早稻はして取流鏑馬の端矢　咫尺齋

猪は來ずとしの矢はぎの拵哉　水戸低哉

矢ともなり手とも成たる案山子哉　沾涼

征矢つくれ鴈は八百鹿の聲　五啓

楊弓の矢の秤目やはるのひま　寥和

箙細工

梅咲やゑびら細工の窓あかり　水戸歩月

靈寶も梅にかざすや古ゑびら　寥和

ひきめくり

くり絶ひき目もわかねさつき雨　二世沾涼

秋かぜや目にはさやかにひきめくり　豐水

弓張のこゝろひきめやまめ男　寥和

むかばき作り

むかばきやかゝる山路の菊の露　兀峰

當世にむかばきつくれ射場はじめ　如此

蘭の花や襟つくるはなれざと　沾涼
むかばきや妻も見まがふ夜與引　路道
むかばきや裾野のはれに桐の花　一尺
むかばきの毛色を鹿の尻目哉　寥和

庖丁師

宇治丸といふは人なりうなき鮓　長治
柚の花やむかしを忍ぶ料理の間　はせを
名月やこゝろからこそ料理人　和葉
庖丁のはたらき見たりはつかつほ　千里

百日の手際見せばや洗ひ鯉　硯壽
初鮭や俎いたけづる波の音　超風
忠政も心得てし歟つるしぎり　寥和

てうさい

都にて珍しく海松のさしみかな　長治
喰ものゝ花咲にけり夕すゞみ　乙由
提重の中をうらなえ梅の花　超波
油揚の音も日永し唐料理　寥和

白布賣

布しまを織ばやをらん霜ふり地　宗伴
波の音しろくや布の嶋さらし　女　山人
ぬの嶋のしら波を月のさらし物　重次
衣かへ白きは物に手のつかず　路通
布賣やみな香久山の干あまり　田社
白布の雪は降けり富士詣　文尺
ぬの賣のいたゞくゆきやゑちご布　寥和

ひたゝれ賣

直垂を脱ずに結ぶ清水哉　一髪
立出てひたゝれ賣らん花の春　群牛

曾我殿は町直垂の袖寒し　雪麿

寺紅葉ひたゝれほしき夕部かな　參和

薫物賣

身にしむや香爐の煙秋の風　徳元

おぼろ月薫物賣がしめりかな　才麿

賣ながらたき物ひめへたむけ哉　貞鵜

風暑し薫ものうりかはなのさき　硯壽

みなみよりたき物賣も來るかも　和圭

夜くだちに誰か薫物ぞ星むかへ　參和

藥賣

松脂はたゞ膏藥の子の日哉　貞徳

見るは目の藥となりの壺すみれ　正成

きくや聞ぬ初ほとゝぎす藥うり　杉國

蛤も栗も夜聲やくすり賣　麥仙

雪の夜や道正庵をたゝく音　參和

連歌師

蔦は連歌もするやはなのもと　親重

髭宗祇池に蓮あるこゝろ哉　素堂

歌か否連歌にあらすにし肴　文隣
二年の月のあるじや珠玉庵　宗瑞
あさがほや廿九日は曇れかし　珪琳
はつ雪や連歌座敷は寒けれど　梅德
連歌師としたしく成ぬ五月雨　林里
連歌しの信濃をつかふ師走哉　祬祥
吐月峯の秋やむかしのいものやま　永家
たち花や連歌のとうのかり座敷　寥和

早歌うたひ

寒聲につれもなげなる早歌かな　寥和

びくに

あつらへて折や比丘尼の錀わらび　休甫
みるふさはかゝれとてしも寺の尼　嵐雪
女中がた尼前ははなの先達か　仝
かれ菊の名の實殘るやまつが岡　谷水
すた髪は糸のやなぎや松が岡　蓮尺
歸るさの阿武に荻の風凄し　知圭
弟子あまの汲や若水わか菜つみ　寥和

にしう

尼達の手染は薄し燕子花　乙由

古き付句
　さまを恨てなりし尼寺
　煩悩の犬や土にて作るらん

秋の夜やつとめの隙の土小いぬ　寥和

けごん宗

東晋の學賢三藏華嚴經を譯せられける時、庭前の池中より忽百葉の蓮花生じけると也。

三界唯心の　心より外には法の舟もなし
こゝろを　しらねばしづみ知ればうかばん

わたるべし蓮の花びら法のふね　桃兆

作りかなはや序開きに詰のはな　龜毛

口きりや衆生はいまだ呑みこます　永我

池水に雨もかほるやはすの花　市寶

法旦か雪道明るあしたかな　寥和

倶舍宗

初霜に行や北斗の星の前　イカ　百歳

東大寺にて倶舍學ありといふ事を

大佛に副て花とや蘭奢待　桃兆

くしやくと糊こは晒奈良法師　龜毛

倶舍をたて入にしてけごん宗の心を

うつくしや五時のひとつを法の花　心祇

狂歌

題倶舍華嚴法花　拾遺哀傷

ほけ經をわがえし事は薪こり　大僧正行基
菜つみ水汲つかへてぞえし

くしやくと年はよりてもたしやさの
菜摘水くみ毛ごん（牛）ぼう（房）ひく　栢筵

倶舎論十煩悩のこゝろを

伊勢で覚るとうの眠りや吉田祭　寥和

酢作り

恵美須講酢うりに袴着せにけり　はせを
酢つくりの麹の側やむめのはな　松巴
すつくりの梅に慣や水かげん　兆賀
酢つくりの鼻をはぢいて梅の花　沖而
きた風の身にしむ暮や塩かつほ　蓮外
煤の日の北風寒き鱠かな　豊水
酒は酢に成て侘しや秋のくれ　寥和

ところてん賣

涼しさや心手へとる水のいろ　嵐雪
水門の内を呼せんところてん　序令
遊ぶ事白雲深きところてむ　白雲
水ゆれて井桁になるやところてん　二世節士
道野邊のやすむ木陰や心太　尺波
醤油にも三輪の印やところてん　道雲
腰かけて喰ふが作法かところ天　佳節
道野邊に清水流るゝ大凝菜　桃兆

静さは浪のすだれやところてん　暁雨
蕎麦くさき俤もあり石花菜　梅徳
鬼灯やまりと蹴上のところてん　甫琴
松一木てりのこしけりところてん　万舟
秋もはや嶺たつやまぞ心太　文東
ところてん女房に見世を預ヶけり　谷水
木の下や叟も涼しきところてん　咫斗
追わけやいやといはれぬころてん　祇丞
こゝろ手へ渡すぞ是を文とよめ　寥和

元朝雪

皓は四ツ今朝より五ツ六の花　亀毛
若菜つむ程の明りや初月夜　寥和
梅さくや一夜〳〵に水の味　昜和
むめ咲や餅にも嘆の二三りん、馬光
梅咲や五百羅漢の鼻の穴　柳隣
九ッに汐の満來る花見かな　寥和
花鳥もまくらの伽よねはん像　柳下
山ぶきの花と磐手や國なまり　佳節
蝶の羽に知らぬや比良の山をろし　沾涼
蝶〳〵やおなし畑に日を暮し　東風
坂に杖段のつゝじのなさけ哉　樓川
春雨やない物喰はんほとゝぎす　鶏口
軒近き椿どものこもりたるに鶯の綿蠻たるはよき遊び所にや
うぐひすの椿を縫ふや仕出し笠　水戸 露白
菜の花や雜煮の屑の一さかり　調羽
彼岸のおくは又かのさくらかな　黑露

暮色

花の日や入相のかねのなりて後　春來
朝毎の曇りは花の化粧かな　志諷
彌生中五雪降ければ
雪散るやさらばさくらもつもるほど　和風
驛路
桑飼ふや淋しき雨のびわのくぼ　寥和
誰が手よりはなれて藪の月日星　可圭
しらをとるいざりの更ゆくけしきこそ物悲しげなるに漸夜もしらみあひて漕わかれたるも又ほいなし
白魚や明て行衞も水の色　和風
不遠慮に長くなれとぞ藤の花　釵尺
松の聲うけてはこぼす柳かな　ゝ
佐保姬に柳は衣紋つくりけり　文尺

夏之部　歌仙

先師をはじめ老俳達の曲節なる手事に我不拍子なるしころを彈て
五位六位色こき交よ靑すだれ　嵐雪
きぬた涼しきかたびらの音　寥和
うつそりと物見に烏ふり向て　笠翁

さかなの取れる雲の夕暮　寥和
三日月の影に塩木を運びつれ　可圭
あいな賴みのどぶろくの旗　寥和
又相撲みねの松風かよふらし　ゝ
いづれ伏見に似たり深川　ゝ
元船へこがれ來にけり小山臥　ゝ
若葉に風のうつくしく吹　ゝ
さけ帶の日はどこに置戀どゝろ　ゝ
障子越にも匂ふ物ごし　ゝ
靑蕎麥の葉もこき交て手向草　ゝ
大文字屋も今が送り火　ゝ
給人は月の都に着にけり　蓮谷
着にけり迄秋はかなしき　寥和
豆腐煮て庵の耆りは花鰹　黑露
隣の鞠にこちの靑柳　寥和
やふ入の間は猫をかりて置キ　ゝ
人の戀しき赤坂の鐘　ゝ
足輕は雪に虎枕うりに出て　露月
けふは爰へ默はこびから臼　寥和

饕めしの腹でも屆く尼が崎　ゝ
旅にも死なずめくら道心　ゝ
旨そうにたばこの煙る笠の內　ゝ
月はおぼろを賴むわかれ路　晋　如
梅咲や二階の口に若おとこ　寥　和
皆めんどりと見ゆる燕　ゝ
いさゝめの事にも嵯峨の高雄のと　ゝ
尼のむかしを聞人も尼　ゝ
仙翁の跡に眼皮のから衣　ゝ
獨參湯の出る饗應　ゝ
板土圭淋しそうなる息つかひ　ゝ
物いふ鳥も起〳〵の顏　ゝ
翌迄は請合にくき花ぐもり　馬　光
蒔はまかるゝ言の葉の種　路　道

田　家

灸居て山なき里は青田かな　勗　和
靑空に遠山黑きわかば哉　連　國
五月雨燈すはやし鐘の聲　硯　壽
紫蘇の葉に又一しほや五月雨　一　尺

あの船に人も寐ぬのり皐雨　寥　和
舟ひきに力かさばや夕すゞみ　水戶　低　哉
乘かけに草の匂ひのあつさ哉　調　羽
小ひらめの釣上られて袷かな　竹　因
傾城のうつむいて居る暑かな　和　葉
鷹の捨た雲井やほとゝぎす　ゝ
梅漬や羅蔔流るゝたつた川　釖　尺
雲の峰その日〳〵のかけ流し　竹　阿
入梅あけて雲押出すや帆かけ舟　馬　光
ほたる火や夕がほ棚の光る君　黑　露
むく〳〵とそなたの空や雲の嶺　柳　隣
螢うりをのれは闇をもどる哉　水戶　遊　鱗
石竹に四五寸殘る夕日かな　東　風
時鳥餘所は置ても勢田の橋　水　馬
露はまだ玉に作らぬ若葉かな　有　佐

大坂淡々老人を尋侍りし時

隱れなきかくれ家つゝむ若葉哉　文　尺
鯛ひらめ白粉厚しはつ松魚　路　道

ある夜靑樓をゆめむ。覺て夢のやうをおもふに、久しく打絕たるを立越し體にて、しか〴〵の事尋ぬれば皆去年の暦をくるがどし。汝が黨の何と云たる者はと問へば、それは死たり、かれは尾張へ立歸りたるなんど、よろづ移りかはれる中に、只かわらざるは夏の夕げしき也。若き人の足もと定まらずうかれあるき、老後のおもひ出と諷ふが我むねにこたへてゆめ覺ぬ。

喰れしは宵寐せし間の蚊なるべし　寥　和
さかづきに請ても見たし初茄子　路　道
五月雨やみじかき夜を引延し　白　杪

苦　熱　行

われ暑をくるしむ事人にとえたり。よつて兼好が指圖にまかせ、南にいさゝかの庭を構へ、折ふしの風を甘ひて日をくらしぬれど、夜はさながら其まゝにも臥がたく蔀をろせば紅爐の中に在がどし。竹婦人を持ねばたはぶれんよすがもなく、漸〳〵ながら團をうごかして明しぬ。

朝はけにうす墨に書あつさ哉　寥　和

ねぶの木は今をはるべの暑さ哉　ゝ
絕がたやけふは一日裸富士　ゝ

秋之部

寐てばかり勿躰なしや菊の花　雲井
吹風を箒につかふ花野かな　勗和
一ツづゝあさがほ咲ぬ星きえぬ　夜白
鰐た風より細し秋のかね　柳下
打かえす女波に誘ふ秋の風　沾涼
聞人から耳ふり立る山路かな　鵜毛

兩國の橋上にして木屛を嗅、遠近いづちともわきがたくて

木屛や國ふたつある橋のうへ　可圭

歌　仙

波のうね幾つのべつ磯の月　柳下
秋ふくやまの小鬢から兀　寥和
一炷に瞬出の鷹や勇むらん　志靜
菓子もあかる駄片よらぬ人　有佐
唐紙は心の丸い玉あられ　且調
ウ指南をうけて草鞋履なり　文尺
絹ばりを乾のかたへつむじ風　志靜
四十八夜の寺を垣間見　柳下
わざくれの出た浅草へ孫をつれ　有佐
杵くどらせる繩の智惠の輪　且調
鬼がわら鼻をつまんで蟬が啼　文尺
時日を撰む社家の振舞　水巴
外聞に茶臼を人に見せたがり　柳下
皮足袋うりの旅もたびく　志靜
華ざかりもはや鰹はかたき持チ　有佐
若むらさきはしらぬ草刈　文尺
和らかく風も淸めの水の月　且調
きのふ洗ッた髮の手ごゝろ　水巴
合點して戀路に隙を費かし　柳下
吝くせよとの御觸戴く　且調
雫にも短くは着ぬ汐衣　文尺
笑て左右へひとつ雷　志靜
組やしき鉢ッチくは通りけり　有佐
袴で寐るは爺様の癖　執筆
云事も物の上手はそらさぬぞ　水巴
飯綱づかひに遣はれにけり　且調
毛がきれて雪に働く椶櫚箒　水巴
鍛冶の戸棚に風折の紋　有佐
嵯峨までの月の土産に針仕事　文尺
柿のあるじの氣に澁氣なし　水巴
ウ蛤と成駄雀はをとけもの　柳下
腐らせるのは眞鍮の伊達　志靜
ありもせぬ錢を大屋のかせくと　文尺
竹の葉ごしに鐘をつくみゆ　水巴
花の山汀にもゝの燃しさり　寥和
冬なら二日一日の旅　超雪

淸　夜

ちとは寐よけふの月叉翌の月　寥和
名月や空かゝはゆき峯の雪　水馬
名月や鳴せたきもの郭公　尺子
獵人の門ともしらず鴈の聲　一尺
猪しゝの富貴に寐るや野の錦　釣尺
乙女子や柚ふる山に尾花ちる　佳節
入相も賓のいる秋に成にけり　文尺

首尾吟

初秋や四ッ過よりの月のいろ　寥和
一心不亂滿つ虫の聲　笙和
鹿の毛は筆で見るさへ哀にて　仝
五里隔たればはや旅ごろも　寥和
いつの間の風に崩るゝ雲の峰　仝
ほからかしても子は育なり　笙和
雛の爲に斑女の宮へまいる人　仝
當世染を着て候と　寥和
はな紙も少は濡るゝ調子竹　笙和
花は芳野か鐘は上野歟　仝
春やげにのろり〳〵と暮かゝり　寥和
彌生晦日の空を見送る　笙和

蘆刈の湯の宿のあるじを武左衛門といふを聞て

武左衛門と聞名も淋し鹿の聲　黑露
名月や朝貌の花も咲んとす　仝

十三夜

ひつぢ穗の青〳〵とまたけふの月　寥和

燕雁の二鳥誠に社日の時を忘れず、春秋を敎る而已歟。頃は八月九日の夜初雁を聞て

初雁の聲や寒さの片たより　志諷
やはらかに日をあてかふや菊の花　東風
初汐やまだ新しきかんな屑　調羽

九月盡

秋と冬と壁ひとへ也きり〴〵す　沾橋
此寺の二王は黑きもみぢ哉　谷水

留守せし孫のさぞや待わびぬらんかれに土產物取らせんとある市店へ立よりみれば

是も菓に返すや葛の煎餅燒　馬光

冬之部

初雪や鳥のとまらぬ枝の上　鬲和
老の腮巨燵にかけて筒井づゝ　黑露

初冬六日は十日十夜のはしめなれば、宿なる尼を伴ひ朝日の彌陀に詣奉る。つき〴〵しき軒端をつたひ行て、かの人知れぬ事のみ多かる宿の裏屋なる所に安置せり。かく〳〵と云入たるに折ふし看主の在合さるよしにて、黑羽織着たる若男帳を開たり。香の煙燻じわたり幢幡の鈴の音より外は人音だにも遠し。かゝる所に是等の道場の有べきとも覺ず。去斯不遠にして別世界に至れるやとおもふ斗淚をとして禮拜す。

初霜や麻過す彌陀へ朝日影　寥和
手にうけて笑ふ間もなし初氷　寸龍

此處の習午時より別當の所の朝のどし

眦を曲てとは時雨きく夜なるべし　龜毛
しら鷺の行さき晴し雪の朝　沾涼

回祿以來造作もそこ〳〵なりければ

爐の土は乾かぬに扨はつしぐれ　水戸 沾橋

茶に好ける人のもとへ招かれて

ほのくらし落葉の上に刀かけ　寥和
納豆の枕を恥よむろの梅　釖尺

分別をかりに預る火燵かな　谷水
初雪やねぢれた枝のあからさま　尺子
うそつかぬ傾城さびし小夜時雨　寥和
顔見せや棧敷こぞりてせばく共　白抄
臘八の粥の片手や無實汁　寥和

一折

拍子木は笠より内のしぐれかな　文尺
夜の筧の涸れ初る音　寥和
籠ぬけも佗しき草の枕して　ゝ
顔を自慢の夕暮の月　文尺
蜻蛉の目のあぶなさは竿のうら　ゝ
摺蓮ふ香も松茸の使者　寥和
ウ 脇ざしを差たそうな御新發意　ゝ
金魚へこぼす白鷺の影　文尺
すんすりと袷の伊達も夏右衛門　寥和
琴の嫌ひな人もないもの　文尺
掛乞も火鉢の側へにじり寄　寥和
棒を喰ふ財とそこが日光　文尺
山川に嶺のあらしは生れ付キ　ゝ

男の湯立あらつきもなや　寥和
手拭を一ッ振ふて頬かぶり　文尺
喜も怒も愛も樂も酒より　寥和
其つもり大坂を月京を花　栢莚
笠の外まで匂ふ春雨　白抄

歌仙

職人盡歌合は七十一番也。延享丑年に半過る迄を集て前集とす。其殘れるを盡して後集成れり。前後百四十二番の祭、首尾能わたりたるを祝す。

數鐘に祭もしまる旭かな　寥和
合歡の葉陰に遠き拍手　路道
田の鶴も歌ある峰を仰きて　東風
一本きめる鳥の餞　万珠
薪河岸に聲の始る霧の月　一尺
飪の湯氣のなびく秋風　佳節
ウ 筒とりの袖へ飛こむきりぎりす　尺子
五人で抱て見たる神木　志諷
雨はれて又取かゝる池普請　和柔

結構過る尻御前の御意　万旭
おもひには師走油もこぼすべし　豐水
夢てふ物に肱が痺れる　東風
晝飯に階子下りれば郭公　佳節
月も出て居て土圭草咲　尺子
秀衡の今に古金を秘し隱し　路道
仙に通ずる寐酒あさ酒　一尺
華の旅生れもつかぬ刀さし　水馬
芝も汗かく春の日當り　和柔
ナ 蝶〳〵に追はれて行や隅田川　東風
鳶の機嫌も天氣也けり　豐水
手まはりも若衆は淋し冬籠　万珠
役者附にて深窓が明く　硯壽
入相の能聞えるぞどつち風　志諷
今にぶんぶく寺に侍べる　路道
瞽女坐頭珠數に列なる麥の秋　万旭
大いさかひの濟だ夕ぐれ　万珠
傘にあぢな印の蜆川　豐水
玉にわたして戻る玉章　佳節

宵月に獨あかるき番椒　和柔

多葉粉の繩のゆれる初鴈　硯壽

叟[ウ]らから誰か見に行敗角力札　万珠

百六ッにて百年忌吊ふ　志諷

初松魚伊豆の御崎の舟競ふ　佳節

雲を帶たり遠山の眉　尺子

蕈茸へ大名菓子も花の恩　硯壽

一聲二聲雉子の朝起　豐水

寥和氏嘗選俳諧職人盡。其前集既已印行。近選其後集。余閲其集書諸伎百工之圖。句選其上。每圖有端詞。其圖則摸古將監土佐氏所畫。端詞則出于昔時和歌者流之手。則其風流古雅可見矣。蓋夫博通人事世態之變而後和歌之敎可施也。則備之逍遙之具。使夫貴价公子宮姬閨秀、日屛居深宮之中、目未嘗觸人間俗事者、其談笑之間就之以通彼人事世態之變也。夫然後和歌之敎可得而施、夫然後可施諸廊廟野、可施諸縉紳冠章嚋人子弟之間。是謂整之於身施及黎庶矣。雖邈矣古乎、吾忖度之則古之撰亦穀於此

也。俳諧之道亦復爾リ。爾ルトキハ則寥之選スル此集ヲ指意ノ所在可キノミ知耳。若廼

選ハ也論何容易ナラン。廼論セハ之則南山之竹モ不足受ルニ我辭ヲ。故ニ不トレ論云。

寛政己巳秋

東皐跋